

白骨の章における「無常」理解について

石 上 智 康

蓮如の御文章（またわ御文）のいくつかは、現在もなお、生きた宗教的文章として、特に浄土真宗において尊重され、教化上の位置は重い。その一つに「白骨の章（真聖全三、五一三頁～五一四頁。御文章五帖目十六）」がある。蓮如はその中で「……すでに無常の風きたりぬれば、すなはちふたつのまなこたちまちにとぢ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて桃李のよそほひをうしなひぬるときは、六親眷属あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず……」と説いた。この場合、蓮如における「無常」の理解を正確に読みとる為に、文章理解は厳密でなければならぬ。まず「すでに無常の風きたりぬれば……」の「ば」という接続助詞をどう解釈するかが問題となる。文法上「ば」が已然形を承けて成立する条件句は、イ、順接確定条件を示す（～ノデ）ロ、順接恒常条件を示す（～ト、決ツテ）ハ、単なる前提接続を示す（～ト・トコロ）場合があるが、右の「ば」についてはロの場合と考えるのが適当と思われる、前件

「無常の風きたりぬ」が成り立つと、決つて後件「二つの眼たちまちにとぢ」が成り立つ——ということ、前件は仮定的であることが出来る。従つて、すでに無常の風が吹いているのだから……という解釈は成立しないと考えるのが妥当と思われる。つまり、この場合の「ば」は、なににの条件が成立すると、きまつてこうなる、と解説するのが自然であろう。とすれば問題の文脈の解釈としては「すでに無常の風きたりぬ」という条件がなりたつと、決つて二つのまなこはたちまちにとぢ、人間は死ぬことになり、なげき悲しんでもその甲斐はないのだ……云々」という文意になる。

蓮如が、いつも無常の風が吹いているので即ち二つのまなこがとぢる、と説いているのではなく、すでに無常の風きたりぬという条件がなりたつと決つて二つの眼がたちまちとぢるといふことになる——と説いた事實は、彼の「無常」理解を究明する上で非常に重要といわざるを得ない。彼の教説に従えば、その論理的必然として、どうしても次の様な理解の

整理にならざるを得ないだろう。即ち、どこかに無常の風というものがあつて(あるいは無常の風が生じて)それがひとたび吹き来ると、決つてたちまちに人間は息たえる存在である、と。疑問の第一点は仏教理解の初歩的通念からして、一体どこに、特別な無常の風というものが存在してそれが吹き来たるのか、ということである。

仏教で無常といわれる場合は、すべての現象世界は無常だということである。ここで無常とは時々刻々、変化すること、物も心も絶えず変化することを無常といつた。この事實は誰でも日常経験することであつて証明を要しない自明のことであるので、直ちに「無常である」と言つた、と理解されている。従つてこの現象世界にあつて無常の風が吹いていない瞬間はないし、いつどこにも無常の風は吹いているのである。にもかかわらず蓮如は、無常の風きたりぬという条件がなりたつと、決つて人間は二つのまなこがたちまちとち、息がたえるのだ、死ぬことになるのだ——と説いたのである。

仏教受容の永い歴史の中にあつて仏教の中心思想が通俗説に流れ、かつ誤解が生じた事実を知らされており、我々は常に注意深くある必要がある。蓮如は「白骨の章」に見る限り、明らかに無常ということを仮定的な条件関係の中で捉え厭世的・絶望的・詠歎的意味を付して理解している。この世

ははかないのだ、まぼろしの如くである。一生すぎやすい、朝に紅顔あつて夕に白骨となる身ではないか。無常の風が吹いてくると、決つてまなことち、息がたえてしまふ。歎き悲しんでも甲斐のないことなのだという具合に。

このような一面的というか限定的な無常理解が蓮如の他の文献と比較して例外的な解釈であつたかといへば、むしろ、事實は逆である。実は「白骨の章」に於て語られているような無常の理解こそ、彼の無常理解の原型であり、基本的な内容であり、ここではそれが最も典型的に象徴的に、日本人の情感に訴え易い美文調の表現をもつて哀切に語られている、ということが出来る。無常が御文章に説かれる箇所は五帖の御文全体で六ヶ所である。いま真宗聖教全書・列祖部で示せば四一七、四五五、四六四、四七七、四七九の各頁と五一三頁の「白骨の章」とにおいてである。その他、無常という言葉それ自体の表現はなくとも前後の文脈から同主旨の教説とみなされる記述が数ヶ所ある。

さて、それでは原始仏教以来、無常とは仏教の思想として通俗的な意味でなく、第一義的に文献上どのように説かれたのであろうか。經典の中のやや遅い部分ではあるが、阿含經で最も一般的な定型化された説として無常・苦・非我の教説がある。「色無常無常即苦。苦即非我。非我者即非我所。如是観者名真實觀。如是受想行識無常……聖弟子。如是観者。於

色解脱。於受想行識解脱。我說是等解脱於生老病死憂悲苦惱。
〔大正藏二・二頁上。その他二・二中、南伝第一四卷、三三、七〇
頁、SN, III, p. 22, 44, 49 等〕「苦・無常・非我の理をさとつて
正しい知慧を完成すれば、人間を迷い悩ませている多くの煩
悩の根本となっている妄執を断ずることができる。何となれ
ば、このような認識を得たならば、もはや何ものかを〔我〕あ
るいは〔わがもの〕と執着して欲求することがないからであ
る。その際には何ら苦しみ悩むことがない。故に苦しみから
の離脱を求める人は苦・無常・非我の理をよく悟つて真実の
認識を完成せよ、という理解の中で「無常」という認識が把
握されたことを想起すべきである。しかもこの際、重要な点
は無常・苦・非我の教説は縁起との関連で理解されるべき思想
だということである。そして縁起の故に無常であるといわれ
る。さらに仏教は大乗へと発展するが、大乘仏教の基本觀念
は空であり、しかも縁起・無目性・空の三概念は同義であつ
て、その中でも縁起が根本であり、他の二つは縁起から論理
的に導き出されるもの、と説明されている。^⑥

仏教の基本思想をふまえ、その関連の中で無常を厳正に理
解する視点に立てば、蓮如の「無常」理解は日本人の者から
の伝統的な通俗説に近いもの、少くとも無常のはかない浮世
で彼の理解は停止してしまつた。その結果、第一に無常を仮
定的な条件関係の中で捉え、その意味は順境から逆境へ変転

することにだけ限定され、ために無常の語に厭世的・絶望的
な意味が強調されることになり、逆に逆境から順境へと発展
変化することも無常の故であるという意味が全く看過される
ことになつた。第二に、無常に対する仏教の立場、つまり無
常の如実智見の完成によつて、換言すれば自己が無常である
ことはさげられないのだから、無常を無常と如実に観じそれ
に従えば苦しみ憂いから解放されるといふ根本認識に対し、
蓮如は何ら仏教思想上の顧慮をはらわぬ結果となつた。自力
聖道の修行者ではなく他力唯信の念仏者であつたとはいえ、
彼の「無常」理解がなぜ通俗説の限界に終始したのか、特に
蓮如の思想が念仏信仰という形態で仏教の中心思想をその第
一義的立場で、きわめて厳正に把捉していることを思えば、
疑問が残るのである。(後日、別稿で詳論する)

1 平川彰「初期仏教の倫理」五六頁(講座東洋思想五・東大出
版会刊)

2・3 中村元「ブツダの教え」十六頁及び廿三・廿四頁参照。
(右同講座所収)

4 前掲「初期仏教の倫理」五十頁。

5 「仏教学序説」六八頁〜七三頁(平楽寺書店刊)

6 中村元「空の考察」一八五頁(千鴻博士古稀記念論文集所収)

7 水野弘元「仏教の基礎知識」一三八頁(春秋社刊)